

ヨーロッパ研究センター設立 10 周年を祝して

南山大学学長

ハンス ユーゲン・マルクス

1991年4月、南山大学ヨーロッパ研究センターが、南山大学における4つ目の地域研究センターとして発足して今年10周年を迎えたことを、心から喜んでおります。

当初、ヨーロッパ研究センターは「日本とヨーロッパ諸国との相互理解に資することを目的とし、広く学際的視野に立ってヨーロッパに関する研究を行なう機関」であり、「特に、現代ヨーロッパ事情とその歴史的背景に研究の主眼を置く」ことを趣旨として設立され、ヨーロッパに関わる領域を研究対象とする学内外の研究者によるヨーロッパ研究の拠点を目指してきました。1995年に創刊された『南山大学ヨーロッパ研究センター報』も、以来順調に号を重ねており、そこには、このセンターにおいて着実にヨーロッパ研究の実績が積み重ねられつつあることがうかがわれます。

ところで、ミレニアムの交代という歴史的な節目を挟んだこの10年間、世界は複雑な変動を経験してきましたが、その主な震源の一つは他ならぬヨーロッパ地域であったと言ってもよいでしょう。センター設立の前年に起きた、東西ドイツの統一達成、その先駆けとして、91年12月にはソ連邦が解体して独立国家共同体(CIS)が創設され、世界中を揺るがしました。この間、東西冷戦後の国際社会のなかでヨーロッパ地域の政治・経済・社会をめぐる情勢は、協調・統合と分裂・紛争という、全く相反する局面を呈しています。すなわち、欧州連合(EU)の結成と拡充、私たちの記憶にも新しい今年2002年の年頭に実施された統一通貨ユーロへの貨幣切り替え等、西ヨーロッパを主とする地域に著しいのは、欧州協調への動きです。一方、旧東欧地域では、異なる宗教・民族の間での対立・紛争が断続的に勃発し、国際情勢を左右する火薬庫の一つと目され続けています。しかし、その中でもポーランド、チェコ、ハンガリーをはじめとする6カ国が1998年3月に、ルーマニア、スロヴァキア等6カ国が2000年2月に加盟交渉を開始しており、欧州連合は確実に拡大に向かっていきます。こうした現代ヨーロッパの動きは、21世紀の世界とりわけ日本にとって、重大で密接な関わりを持っています。欧州連合の強化進展は、21世紀国際社会の中で、アメリカ、日本、そして今後めざましい飛躍が予想されるアジア諸国にとって、ヨーロッパの存在を強くアピールするものですし、また、旧東欧の紛争に対しては、その解決と安定回復に向

けて、日本の理解と協力が不可欠なものとなることでしょう。

こうして従来にも増して多岐多様にわたってゆくヨーロッパとの相互関連を、日本が、より良好な形で実現してゆくためにも、現代ヨーロッパの動向に関する研究の発展と深化をはかることは、ますます重要な課題となりつつあります。とりわけ、日本の主要都市の一つである名古屋に位置するカトリック大学である本学においては、建学の精神たるキリスト教世界観はヨーロッパ文明と深い関わりを持っており、ヨーロッパを統一的に理解するための研究成果を世に供してゆくという、このセンターの社会的役割は、今後ますます高まってくることでしょう。研究センターの今後いっそうの充実を期待いたします。